

第 16 章

現代社会における宗教 (藤井隆道)

1 宗教とは何か

1.1 宗教の定義

現代社会では、宗教は姿を消してしまったのであろうか。そうではない。私たちは、意識するにせよしないにせよ、宗教的なものと関わりを持ち生活している。このエッセイでは、現代社会で、どのような仕方で宗教が生きているのかということを、いくつかの事例を通じて考えてみたい。

しかし宗教とは、いったい何であろうか。世界には数多くの宗教がある。仏教、神道、キリスト教、イスラーム教、ヒンドゥー教……これらはみなすべて宗教である。もちろんこれは網羅的なリストではない。そしてこれらの宗教は、それぞれがさらに小さな宗派などに分派し、その信仰を生きる人々の宗教生活のあり方も多様である。これらすべての宗教に共通する特徴はあるのだろうか。これは宗教の定義の問題であるが、なかなか難しい問いである。俗に、宗教学者の数だけ宗教の定義があるとされているほどである。その難しさにはいくつかの理由が考えられる。

まず宗教とは、モノのように、はっきりとした色やかたちをもって、目の前にあるものではない。宗教施設 (寺院や神社、教会など) や、教えを記した書物は目にみえるが、それらは宗教そのものではない。宗教は人の頭のなかにあり、それが生活や活動のなかに現れるものである。人の頭のなかを覗き込むことはできないし、行動は観察できるが多様な観点から評価されるものである。

さらに、人間が社会をつくるところに必ず宗教があり、私たちは宗教的なものに取り囲まれて生まれ育つ。私たちが宗教をどのようなものとするか、そのイメージは特定の社会と文化、そして個人の環境などに左右される。こうしたことも、誰もが同意できるような仕方で定義を作ることが難しい理由である。

そして次のような原理的な困難もある。宗教が何かというのは、宗教を探求する作業にとってある意味で究極の問いであり、探求の最後に結論として答えが与えられるものである。したがって、宗教について考え始めたばかりの時点で、それに十分に答えることはそもそも不可能である。

このように、宗教とは何かという問いは難しいものではあるが、それに一定の意義があることも確かである。宗教について理解を深めていこうとするにあたり、宗教はどのようなものか、という約束事を仮に決めておくのは、宗教とは考えられないものまで考察の対象に含めてしまうなどの無用な混乱を避けるのに役立つ。

また先にも述べたが、人が宗教をいかに捉えるかは、生まれ育った環境や、現在置かれている状況により大きく左右される。自分にとって宗教がどのようなものなのか、それを言葉に表現して記述してみることは、自身の宗教観——あるいは宗教に対する先入観と言ってもよいが——を確認すること

につながり、また宗教について考察を深めるなかでそれを吟味し、必要に応じて修正していくこともできるのである。

さて、宗教の定義には、大きく分けて二つのタイプがあると考えられる。その二つとは、宗教が「何であるか」を言い当てる実体的な定義と、宗教が「どのように働くか」、「何の役にたつのか」といったことを説明する機能的な定義とである。いま単純な例を示すと、「宗教は神に対する信仰である」という定義は前者の、そして「宗教は、それを信じる人に心の安らぎを与えるものである」という定義は後者のタイプになる。さしあたり、どちらのタイプの定義が優れているのかということを考える必要はない。どちらの視点も、宗教という事象を考察するうえで有意義なものである。

様々な学者や思想家たちが提示した定義について調べて、考察するのも有益である。それぞれの定義者は、学問的、思想的、そして宗教的なバックグラウンドをもとに考察して、実に多種多様な定義を示している。有名な定義を以下に紹介する。

宗教とは、神聖すなわち分離され禁止された事物と関連する信念と行事との連帯的な体系、教会と呼ばれる同じ道徳的共同社会に、これに帰依するすべての者を結合させる信念と行事である。

これは社会学者デュルケムが、『宗教生活の原初形態』（岩波文庫版 p.86）という著作のなかで提示した定義である。この定義には、宗教を考えるうえで重要な材料がいろいろと詰まっているが、いま簡単に三点だけ注意を促しておく。

第一に、「神聖なもの」という概念を定義に組み込んでいる。宗教を信仰する人の立場に立って、その人の宗教世界を〈聖なるもの〉を中心としてみる見方が、宗教学では一定の支持を得てきた。たとえば何の変哲もない山が、ある信仰を持つ人にとって「聖なる山」となる。そこは聖なる場所、すなわち聖地でもある。あるいは祭礼や礼拝の時間は、信仰者にとって聖なる時間となる。こうして、宗教的世界では、様々なものが聖なる価値を帯びるのである。

第二に、信念、行為（行事）、そして集団（教会）という、宗教を構成する要件に言及している。私たちは宗教と聞くと、個人の内面的な信仰を中心に捉えがちであるが、同じように儀礼などのかたちをとる行動としての側面も重要であり、また宗教生活を営む人々が集団・共同体を形成するという視点は不可欠である。

そして第三に、この定義は、宗教の機能的な側面も明らかにしている。その機能とは、宗教的信念を共有するメンバーたちの結束を強化するというはたらきである。人と人とを結びつけるというのは、宗教の担う本質的な役割である。

1.2 宗教の分類

ここまで定義について述べてきた。一言でいうなら、宗教を定義することは、宗教と宗教ではないものとの相違を明らかにすることである。一方で、宗教の中にどのような種類のものがあるのかを問題とするのが、宗教の分類である。

たとえば、よく知られたものとして、信仰の対象である神をどのように考えるかに応じた分類がある。この観点から、宗教はまず大きく、有神論的宗教と無神論的宗教に分けられ、前者はさらに、多神教と一神教に分類される。これらをさらに下位の分類に分けることも可能である。

もちろん、様々な宗教があるのと同じように、その分類の仕方もまた様々である。以上で述べたのは、神の観念に基づく宗教の分類の他に、宗教の伝播の広がりという観点から「民族宗教」と「世界宗教」とに分類することや、宗教の発生形態の観点から「自然宗教」と「創唱宗教」に分けることも

よくなされる。また「アニミズム」や「トーテミズム」など、特定のタイプの宗教を名指す術語もいろいろとある。

実際のところ、分類の仕方は無数に考えることができる。たとえば、「日本語の50音順でア行からタ行までで名称が始まる宗教と、それ以外の宗教」といった分類も不可能ではない。しかしそうした分類に意味があるとは思われない。分類された宗教のタイプがどのような性質を持つのかを考えることにより、その分類が意義を持つことになる。例えば、「多神教には、創唱者がいない宗教が多いのではないか」といったことを調べてみるのできるのである。

「分ける」ことは「分かる」ことにつながるものであり、分類は知的探求の王道であるといえる。ただし分類について留意すべきなのは、特定の宗教に対して持っているイメージや、あるいはインターネット上などのあやふやな情報などに基づいて、安易な判断を下さないということである。分類は、「レッテル張り」に結びつきやすい。特に宗教のような文化事象についてはそうである。たとえば「一神教は不寛容である」といった言説が、インターネット上で散見される。こうした言説を批判的に検討することができるような知識や視野の広さを得ることが、宗教を学ぶことのひとつの意義である。

調べてみよう！

- 宗教について学ぶことにはどのような意義があるだろうか、考えてみよう。
- 身近な宗教（仏教、神道）や広く伝播した宗教（キリスト教、イスラーム）の他に、どのような宗教があるだろうか。
- 宗教とは何か、自分で定義を作ってみよう。
- その定義は、あなたが宗教と考えるものを網羅しているか、そして宗教とは考えられないものを含んでしまっていないか、チェックしてみよう。
- 宗教学者や思想家たちが提示した宗教の定義に、どのようなものがあるだろうか。
- 宗教の分類方法には、どのようなものがあるだろうか。

2 日常のなかに潜む宗教

2.1 娯楽コンテンツのなかの宗教

私たちの生きる社会のどこに宗教が生きているのだろうか。それは遙か昔の、あるいは遠い世界の話であって、自分には無縁だと感じている人も多いであろう。現代人の「宗教離れ」が叫ばれて久しく、私たちは宗教との接点をほぼ失ってしまったかのようなのである。ところが、世俗化された日常生活にも宗教性が潜んでいる。以下いくつかの事例をみてみよう。

意外に思われるかもしれないが、音楽やアニメといった娯楽コンテンツもまた、現代における宗教的なものの隠れ家である。たとえば、J-POPやロックなど日本語のポップミュージックの歌詞には、「神さま」、「祈り」、「運命」（定め）といった宗教的ボキャブラリーがしばしば登場し、生まれ変わり（輪廻）や因果応報のようなモチーフが現れることもある。そしてリスナーは、このような歌詞を、大きな違和感を抱くことなく受容している。

アニメや漫画には、宗教的表象がより豊かに多様な仕方で現れる。たとえば、あるキャラクターの死を、頭上に「天使の輪」をのせてコミカルに表現するような何気ない表象も宗教性と無縁ではない。また特定の聖典や神話から世界観、物語の枠組み、あるいはキャラクターなどを借用する場合もあ

る。手塚治虫の『ブッダ』は、宗教的偉人の生涯やその教えを、正面から取り上げる作品の代表例であるが、そのほか、特定の教団や宗教組織が宣伝・布教を目的として、この種の作品を制作することもあるし、世界宗教の教祖をパロディ化して登場させるコメディ作品が人気を博したこともあった。また、宗教的な描写が顕著ではなくとも、作品のストーリーや雰囲気、構成などに宗教性を感じさせる作品もある。たとえば宮崎駿監督のスタジオジブリのアニメは、その宗教性がしばしば指摘されている。

娯楽コンテンツにみられる宗教的表現の多くはカジュアルなもので、真摯な信仰に根差したものであるようには見受けられない。制作者が宗教的要素を作品に取り入れる理由は様々であろうが、多くの消費者が、そうした商品に魅力を感じ、受け入れているというのは確かな事実である。そして、たとえ何気ない表現であっても、世代を超えて宗教的な観念が伝達されていく媒介として作用するのであり、実際のところ、成長の過程で幼少期や青年期に接した宗教的な表象が、その後の宗教観・死生観などに与える影響は決して小さなものではないと考えられる。

2.2 流行する宗教

日常生活のなかに知らず知らずのうちに宗教的なものが入り込む一方で、宗教的なものがメディアを通じて多くの人の関心を惹きつけて、一種の流行現象を引き起こすこともある。2000年代以降にも、江原啓之など「スピリチュアル・タレント」が活躍した「スピリチュアル・ブーム」、そして「パワー・スポット」の流行、「仏像ブーム」、「御朱印ブーム」など、宗教に関わるブームが次々と起こった。

「スピリチュアル」なものに関心を寄せるこれらの流行の担い手には、自身が宗教に関わっているという意識が希薄であることが多く、なかには宗教への抵抗感を隠さない人もいる。しかし実際には、当事者たちの信念と実践の大部分は、既存の宗教伝統に接続している。たとえば「スピリチュアル・ブーム」では、日本や西洋の宗教や神秘思想の伝統から、輪廻転生や靈魂の不滅性、さらには守護霊などといった雑多な観念が引き継がれて多様な言説が形成されているし、「パワー・スポット」として取り上げられる多くの場所は、古くからある神社や寺院である。

一方で、これら流行現象のうちに、現代的な宗教性の特徴をみてとることもできる。日本のように世俗化の進展した社会において、宗教は公的な領域での影響力を次第に失い、個々人が、プライベートな生活世界においてのみ関わるものとなる。これが「私事化」という、現代宗教の動向をみるうえでの基本的な視座になる。

伝統宗教では、血縁や地縁、あるいは信仰を介して結び付いた共同体において、教えや儀礼の体系が共有されて、日々の宗教生活が営まれていた。それに対して、スピリチュアルなものなどに関心を寄せる人は、おおむね個人単位、あるいは少人数のグループで活動する。興味関心を共有する人たちがゆるやかなネットワークを構築することもあるが、特定の団体に所属するわけではない。またその実践は、「このようにすべきだ」という規範意識を伴うものというより、目的実現や利益を求める個々人の動機に根差していることが多い。

以上のことと密接に関わるが、現代人は、宗教を消費の対象として意識するようになってきている。「消費者」は、その都度、様々なメディアや仲間を通じて情報を得つつ、複数の選択肢のなかから自身の目的意識や欲求に適合するものを選んで対価を支払い、それに見合ったサービスを受ける。このような意識の変化は、伝統的な宗教活動の領域においてもみられる。たとえば、インターネットなどを通じて発注できる、葬儀や法要の場に僧侶を派遣する「お坊さん紹介サービス」が近年話題を呼んだ。定額制などの分かりやすい料金体系は、宗教に対しても明確なコスト意識を持つ現代人にとつ

て受け入れやすく、血縁や地縁を基礎とした既存の宗教的ネットワークを持たない人たちが、それを敬遠する人たちから、一定の支持を得ている。

2.3 聖なる場所を訪れる人々

現代人の消費行動と宗教が関わるもう一つの事例をみてみよう。「巡礼」は、宗教的実践の古くからある形態である。教祖や宗祖、その他の宗教的偉人にゆかりのある地、あるいは由緒や格式を誇る寺院や神社は、宗教的な価値を帯びた場所、すなわち「聖地」として巡礼の対象となってきた。

現代日本でも数多くの人々が聖地を訪れる。その動機は多様化してきているが、一般に、信仰や宗教的熱情により動機づけられている人の割合は決して大きくない。有名な寺社を訪れる大多数の人の目的は、何とんでも観光である。宗教組織や地域の自治体の側にとっても、聖地は、収入を得たり地域振興をはかるうえで「お客さま」を呼び込む格好の観光資源となっている。

しかし、聖地を観光する現代人の意識や行動が宗教性を全く欠いているかということ、必ずしもそうではない。確固たる信仰を持たなくても、寺社の参詣により、物質的もしくは精神的な「ご利益」を期待する人は一定の割合でいる。また由緒ある寺院や神社を訪れる人は、長い歴史や文化の奥深さに思いを馳せるだけでなく、その荘厳さ、神聖な雰囲気魅せられる。聖なるものに接することに癒しの感覚を覚えたり、あるいは自身の内面や生き方に改めて向き合う人もいるであろう。それは日常を離れた「聖なる時間」である。仏像に見入る人は、造形美に惹かれるばかりでなく、宗教的な感情を揺さぶられるかもしれない。現代人は、日常のなかでの宗教との接点を失ってきたが、それでも望んだ時に、個人的な仕方でも聖なるものに関わろうとする人は少なくない。聖地への観光もまた、そうした現代人の宗教心のあらわれだとみることができる。

ここまで、日常生活のなかの宗教性についてみてきた。とくに娯楽や流行における宗教性に対しては、軽薄であるとか、いかがわしいといったネガティブな評価や批判が向けられがちである。しかし本稿は、そうした価値評価を論ずる場ではない。重要なのは、高度に世俗化された社会に生きる現代人もまた、折にふれて、聖なるものを求めるのであり、また現代的な宗教性の特徴が、こうした文化事象のうちに明瞭に認められるということである。

調べてみよう！

- 映画、アニメ、漫画、音楽……あなたの好きな娯楽コンテンツのなかに、あるいはあなたが幼少期に接した娯楽コンテンツに、どのような宗教的モチーフが現れているか、考えてみよう。
- 「スピリチュアル・ブーム」、「パワースポット・ブーム」、「御朱印ブーム」などについて調べてみよう。
- 「お坊さん紹介サービス」について調べてみよう。それに対して、どのような評判、意見があるだろうか。
- 最近、宗教的な施設や聖地を訪れたか。どのような動機でそこを訪れたのか。
- 世界の聖地について調べてみよう。
- 京都の観光地のランキングをみてみよう。そのうち、どれくらいが宗教施設だろうか。
- あなたの住んでいる場所（あるいは地元）で、宗教的文化遺産が町おこしなどに用いられている事例はないか。
- 近年では、アニメの舞台なども「聖地」と呼ばれ、「巡礼」がさかんに行われている。どうしてこのようなメタファーが用いられるのだろうか。

3 問題を起こす宗教、問題に対処する宗教

3.1 問題を起こす宗教

ここまで述べてきたように、私たちは宗教的なものに囲まれて生活している。ところが、宗教に対してネガティブなイメージを持つ日本人も多い。現代人の「宗教嫌い」には様々な理由が考えられるが、その一つとして、宗教が、世界各地で様々なトラブルを引き起こしていることが挙げられる。

私たちは日常的に、メディアを通じて、紛争やテロなど暴力的な事件のニュースに接する。そのなかには、宗教組織や指導者が関与したり、宗教・宗派の相違が対立を生んでいることを示唆するものが少なからずある。宗教は心の安寧をもたらし、平和を指向するものであるはずなのに、実際は社会を分断し、対立と暴力を引き起こし続けているという認識が、宗教に対する不信感を生むのである。

宗教は暴力的なのだろうか。このような問いに端的に答えることはできない。ただし、宗教教義に由来する信念や価値観の食い違いこそが、対立を引き起こしているというのは、往々にして単純すぎる見方であることに、まず留意する必要がある。多くの場合、個々の紛争やテロの背景には、貧困や差別、疎外といった社会的、経済的な諸要因が複雑に絡み合っている。

一方で、一定の条件のもとでは、宗教が暴力と親和性を持つことが確かに認められる。先に触れた通り宗教は社会的統合の機能を持つ。共通の信念や儀礼を通じて、共同体のメンバー間の連帯は強化される。それはまた潜在的に、共同体の外部にいる人たちとの断絶を生む。つまり宗教は人と人の結びつきを作り出すが、しばしばそれは人と人との分断にもつながる。そして宗教が持つ人々を結束させる力は、「他者」の抑圧や排除、あるいは異なったグループ間の対立を扇動しようとする指導者にとって利用価値の高いものである。

また教義・教説のレベルでは、諸宗教、特に世界宗教の聖典は豊かな内容を持ち、そこからいかなる実践倫理や社会思想が導かれるかは解釈に依存するといつてよい。そこで、宗教指導者が、教えに極端な、また特異な解釈を与えることにより、他者への憎悪や暴力を扇動する言説が形成される。そしてまた、宗教的信念は、人生の究極的な価値に関わるものであるために、それに基づいて人が常識や日常倫理を超え、断固たる行動をとることもまたありえるのである。

3.2 問題に対処する宗教

宗教が、現代社会において問題を引き起こすだけのやっかいな代物であるなら、なくなってしまったほうがよいということになるだろう。しかし今なお、宗教は多くの人に求め続けられている。科学技術の進歩の恩恵により、生活は豊かで便利なものになった。しかし依然、私たちは日々、大小さまざまな困難にぶつかり、苦悩し、時には行き場を失ってしまう。こうした困難の多くは、諸宗教が古くより向き合ってきたのものである。

そしてまた、現代社会の抱える様々な課題に対して、宗教の持つ力や果たすべき役割が見直される局面もある。そうした事例の一つとして、大規模災害における宗教のはたらきを以下で取り上げる。2011年3月に東北地方を中心に発生した東日本大震災では、地震とそれに引き続く津波により多くの人が犠牲になり、甚大な被害をもたらされた。この災害に際して、多くの宗教団体、そして宗教者が、自らの宗教的信念にしたがって、被災者・被災地の救援・復興のために活動を行ってきたのである。

伝統教団にせよ新宗教教団にせよ、規模の大きな宗教団体は、全国的なネットワークを持っており、また被災地域内にも活動拠点を有していて、人的そして物的支援を行ううえでの条件が整っている。地震と津波の被害の大きかった地域では、寺院や神社、教会といった宗教施設が避難所として地域住民に開放された。また被災地内外の宗教団体あるいは宗教者が、支援物資の調達や運搬、がれき撤去や炊き出しなど、ボランティア活動に従事した。

こうした救援・支援活動は、宗教者に限られない。一方で、宗教者ならではの活動のあり方というものもあった。震災では、多くの人が、生活の拠点や基盤とともに身近なかけがえのない人を失った。震災直後、夥しい数の死傷者が出た地域では、葬儀を行うどころか、棺も戒名もなく、遺体を毛布で包んで火葬するだけといった痛ましい状況が起きていた。そうしたなか、僧侶が遺体安置所や斎場において行う「読経ボランティア」など、宗教者たちは「死」に向き合った人に寄り添う活動を始めたのである。

個人でできることには限界があるが、震災直後から、宗教者たちが連携する動きが出てくる。宗教や宗派の垣根を超えて心のケアや弔いのボランティアを行うために、四月初めに仙台市内の斎場に設置された「心の相談室」は、その後まもなく、東北大学の宗教学研究室に事務局を移し、宗教者、カウンセラー、医療者の有志により運営される新たな組織としての活動をスタートさせた。

カウンセラーや医療者が被災者の心身のケアに従事するのは分かるが、宗教者が連携することの意義は何であろうか。身近な親しい人を災害で突然失った人は、悲嘆とともに、行き場のない様々な葛藤や後悔、そして問いを抱え込むことになる。なぜこのような目に私が遭わなければならなかったのか、なぜあの人が犠牲にならなければならず、自分が生き延びたのか、亡くなった人はどうなってしまったのか……この種の問いに対して、実証的に答えを導くことは難しい。一方で諸宗教には、死に向き合ってきた長い伝統がある。もちろん宗教者であっても、誰もが納得できる「正解」を持っているわけではない。そこで、これらの問いに向き合う被災者に寄り添い、話を聞く「傾聴」が、「宗教的ケア」の基本となる。この活動は、教団の宣伝や勧誘、布教を目的としたものではなく、信仰の押し付けなどはあってはならない。支援活動とともに布教を行った宗教団体が一部あったと伝えられるが、あくまで例外であり、多くの宗教者は、災害の場で求められる支援のあり方を理解し、布教活動を行うことなく活動を続けたのである。

こうした被災地での宗教者の活動は、さらに広がりをもせることになる。先述の「心の相談室」の活動を踏まえて、震災一年後の2012年4月には、東北大学大学院文学研究科に「実践宗教学寄付講

座」が開設された。そこで、宗教・宗派を超えて、被災地のほかに医療機関や福祉施設などの公共空間で「宗教的ケア」を提供する専門家として「臨床宗教師」を育成するプログラムが開始された。自らの信仰を持つ宗教者が、布教や宣伝を目的とすることなく、相手の宗教性を尊重しつつ、死に向き合う人の苦悩や悲嘆のケアにあたるのである。その後、他大学にも講座が設置され、2018年には、一般社団法人日本臨床宗教師会による資格認定制度がスタートした。

ここまで、現代社会の困難な局面に対処する宗教者の活動として被災地支援を取り上げてきた。こうした活動のうちに、現代社会における宗教の可能性を見出すことができるかもしれない。そのひとつが、たとえば宗教・宗派を超えた連帯である。宗教というと、宗派などの違いにより争ってばかりだというイメージが先行するが、支援活動のなかで、教義や実践の相違を乗り越えて協働する可能性が開かれた。そして同時に、苦悩や悲嘆を抱え、また「死」に向き合って生きる人間にとって心のよりどころとなるという、古くから宗教が果たしてきた役割が、あらためて見直されたのである。

調べてみよう！

- 宗教に関して、最近どのようなニュースに接したか。その概要を述べてみよう。
- 世界各地の紛争に、宗教がどのように関わっているのか、調べてみよう。
- 東日本大震災の際に、宗教者、あるいは宗教団体が具体的に行った活動について調べてみよう。
- 臨床の場における宗教者の活動について、「ホスピス」、「ビハーラ」、「スピリチュアル・ケア」などのキーワードをもとに調べてみよう。
- 「臨床宗教師」について調べてみよう。

(参考文献)

- 稲場圭信・黒崎浩行編 (2013) 『叢書宗教とソーシャル・キャピタル 4 震災復興と宗教』, 明石書店.
- 岡本亮輔 (2015) 『聖地巡礼 世界遺産からアニメの舞台まで』, 中公新書.
- 島蘭進 (2012) 『現代社会とスピリチュアリティ』, 岩波書店.
- 藤山みどり (2020) 『臨床宗教師 死の伴走者』, 高文研.
- 堀江宗正 (2019) 『ポップ・スピリチュアリティ メディア化された宗教性』, 岩波書店.
- 堀江宗正編 (2018) 『いま宗教に向きあう 1 現代日本の宗教事情』, 岩波書店.
- 脇本平也 (1997) 『宗教学入門』, 講談社学術文庫.